

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370572

研究課題名(和文)日本語学習者の会話力強化のための学習支援システムの研究

研究課題名(英文)A research on CALL for enriching Japanese learners' conversational capacity

研究代表者

才田 いずみ(SAITA, IZUMI)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：20186919

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本語学習者が日本語母語話者と日本語で相互交渉を行う際に円滑な会話参加ができるよう、有効な支援を提供することにある。そのために、同性同士の接触場面の雑談と母語話者場面の雑談を収集し、その中から学習リソースを選定して、「雑談名人」と銘打ったウェブ教材として公開した。

収集した雑談の構造を分析したところ、母語話者の雑談は語りを中心であるのに対し、接触場面の雑談は情報要求と情報提供が中心で、会話の進展は、情報提供への聞き手の反応が左右していることがわかった。そこで、聞き手からより有効な反応を引き出す情報提供の在り方を考える課題を設定し、ウェブ教材に組み込んだ。

研究成果の概要(英文)：This research aims at providing Japanese language learners effective support to have pleasurable chat with both native and non-native speakers of Japanese, as chitchatting sometimes becomes very hard for the learners.

For the purpose, casual talks in contact situation held by three women from China, Taiwan and Japan, and by same-sex three pairs of native Japanese were collected and analyzed. Quite a few video clips are found on the web-material as the learning resource.

The analysis shows that the native speakers' chats have narratives as their main construct, but the chats in contact situation have asking and giving information instead. Though the asking leads the flow of the talk, the answer also plays an important role for the conversation. If the answer is poor with little information, the chat can easily come to an end. Therefore, the tasks to give the answers which invite good prompt reactions are equipped in the web-material.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育 コミュニケーション 雑談 会話教材 接触場面 ウェブ教材

1. 研究開始当初の背景

国際交流基金(2012)によれば、日本語学習者数の伸びは、国内ではやや停滞みではあるものの、世界全体では400万人を超える勢いを見せており、依然として拡大基調にあると言える。そして、日本語学習者のほとんどは、口頭コミュニケーション力の習得に高いニーズを持っており、さまざまな日本語教育機関では、そのニーズに応えるべく、かなり以前から会話能力や口頭発表能力の育成を意識した教育を実施してきている。昨今では、ホームページを経由してアクセスする会話練習用ソフトウェア Language Partner Online など、新しい形の付随教材を備えた教材(岡・筒井他(2009)『上級へとびら』)や、初級初期から自然なやりとりを意識させる東京大学の会話教育実践(増田・本郷, 2006)、シンガポール国立大学での初級からの待遇コミュニケーション教育(ウォーカー, 2011)など、さまざまな観点から口頭コミュニケーション力の強化に切り込む努力と工夫が重ねられている。

こうした努力と工夫がなされるのも、日本語学習者がどのような学習環境で日本語を学んでいるかが、日本語の習得に大きな影響を与えるからであると考えられる。テクノロジーの発達は適切な利用によって、海外など、日本人との直接のコミュニケーション機会が限定的にしか得られない環境にいる学習者に対しても、日本語に関する情報や学習リソースを提供して、必要な知識や練習機会の拡大を図ることを可能にしている。学習支援システムを充実させ、十分な日本語使用機会を確保することで、日本語の使用機会の少ない学習者にも、適切なコミュニケーション行動を強化する可能性を拓くことができる。本研究も、こうしたICTの利用を考えるものである。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、日本語学習者が日本語母語話者と日本語で相互交渉を行う接触場面や日本語非母語話者同士で日本語コミュニケーションを行う第三者接触場面において、相手に違和感を与えない円滑な会話参加ができるよう、有効な支援を提供することにある。

会話教育の重要性は誰もが認めるものであり、会話教材はこれまでも数多く開発されてきた。従来の日本語教科書を見れば明らかのように、そのほとんどは、依頼したり苦情を言ったり議論したりなど、何らかの明確な行動目的のもとに日本語を使用するもので、人間が日常的によく行うと思われる、単なるおしゃべりという、何の目的もなしに行う雑談という言葉行動への対応を教える教材は、あまり作られてこなかったのである。

その理由としては、雑談が教える価値のあるものとみなされていなかったこともあるだろうが、それよりも、雑談が一定の言語表現や

場面・状況と結びついたものでなく、かなり自由度が高い上に、参加者の相互作用が重要で、話し手と聞き手双方の役割がかみ合わないと円滑に展開されないところに原因があると考えられる。つまり、雑談は特定のスキーマを持たないため、教材化されにくく、何をどう教えればよいか特定されないため、教えられてこなかったのだと言えよう。

ところで、雑談は、社会言語学的にはかなり重要な意味を持つ活動である。学習者にとっては目標言語社会における円滑かつ緊密な人間関係の構築のために、大きな力を発揮すると考えられる。しかしながら、たいていの学習者にとって、母語話者との雑談は場合によっては、かなり難易度の高いタスクである。母語話者がイニシアティブをとって場をリードしてくれれば、学習者は後に従うだけでよいが、学習者が母語話者を巻き込まなければならぬ場合は、どのようにして雑談の場を作り、維持・展開させていくかについて教えられていないため、うまく対応できないケースも多い。結果として、日本語母語話者との間に気軽に話をする関係を構築できずに疎外感を感じたりすることになる。

本研究は、こうした日本語学習者の円滑な会話参加を可能にするために、会話に関する知識や技術のうち、日本語教育の場では、これまであまり教材化されてこなかったものたとえば、役割語の使用や雑談に焦点を当ててウェブ教材を作成し、広く日本語学習者の会話力向上のニーズに応えることを具体的な目的とする。

3. 研究の方法

研究方法としては、まず、実際の日本語使用からデータを集めることとした。

役割語については、使用があり得る「遊び」のある母語話者場面をビデオに収録してみたが出現しなかったため、作例を用いて学習者に知識としての情報提供を行うこととした。

雑談については、まず、学習者と日本語母語話者による接触場面の雑談会話と、日本語母語話者同士の母語話者場面の雑談会話を収集し、筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』(くろしお出版)の母語話者による雑談の分析を参考に、それぞれの構造を分析し、何らかの違いがあるか否かの検討を行い、日本語学習者にとって有用な知識や技術の抽出を試みた。

その後、得られた情報を教材化するためのデザインを行い、ウェブ上で教材を公開した。

4. 研究成果

今回は、同性同士の会話に絞ってデータを収集した。接触場面会話については、同一研究室に属する日本(J)・中国(C)・台湾(T)の3名の女性による雑談データをビデオ映像とICレコーダに記録した。母語話者場面については、親しい間柄の男性ペア1組と女

性ペア2組による雑談データを収集した。接触場面については、諸般の事情で母語話者と同等の親しさの組み合わせを得ることができなかった。このことは、会話研究として厳密な比較対照を行うのであれば、問題だと言えるが、本研究が目的とする学習者に対する学習すべき技能や情報の提供という観点から言えば、すでに親しい関係が築き上げられているメンバー同士の接触場面会話では、どこを学ぶべきかが浮き彫りにならない可能性があったので、逆に、好都合であったと言える。

分析の結果、いずれの雑談も、筒井(2012)が提示している30の雑談の連鎖組織にはずれるものはなく、情報展開の基本的な構造には大きな異同がないことを確認した。しかし、雑談の中でどの構造を多用するか、という点では、今回の接触場面会話と母語話者場面会話には以下のような違いが見られた。

まず1つめとして、筒井(2012:311)で、情報提供に対して(儀礼的)評価を述べることが話の先を促す方策の1つだ、とされている点に関して、今回の接触場面会話の中でCが情報提供者となっている部分に関して、評価的コメントを得ることができないような情報提供が行われている。

(Cがパーマをかけに行きたいという話)

- 32J: 髪は染めるんですか。
33C: うーん(1)わからないですね。
34J: あ.>[わかんないんですか].<
35T: [染めたいの?]
36C: んーびようしんに(.)[意見を] =
37J: [ああ相談して]
38C: =聞きたいです。
39J: ああああ。
40T: <そっか.> =
41T: =なんでパーマかけたいの?(.)

上の32~41は、情報要求 情報提供 理解 (再度の)情報要求 情報提供 理解 (新たな)情報要求、という連鎖になっている。33と36で2回行われた情報提供は、それに対して評価が加えられるような内容ではなく、理解で話が終わりそうなところを、35と41でTが情報要求を行っているので話が続いている。つまり、相手の働きかけによって話が続いているのであって、情報提供者Cは自身の髪について、という自分にとって関心のある話題が取り上げられているにも拘わらず、話を続けるための貢献をしてないことになる。接触場面において、学習者がずっとこのような対応をしていれば、対話相手はかなり疲れることになる。C自身には髪を染めることに関して積極的な方針がないため、上のような情報提供しかできないのであれば、「わからない」という情報を提供するよりは、会話参加者に「どう思うか」と働きかけたほうが話が進展しやすいのではないだろうか。自分がかつとも多くの情報を持

っていると考えられる事柄について情報要求をされて、「わからない」と答えれば、そこで話が終わる可能性は極めて高くなる。

もう1点、違いが見られたところは、母語話者場面では「語り」が中心になって会話が展開しているのに対し、接触場面会話では、話題が提示されると、それに対する情報要求が行われ、語りの要求や自発的語りがあまり見られない。そのためターン交替が頻繁で1ターンの発話の長さが母語話者の雑談に比べて短い。「語り」を要求する質問(どんなストーリー?)に対しても、簡単な情報提供が行われただけで、基本的に、情報要求 情報提供 理解の連鎖からの脱却が少ない。接触場面で話がなめらかに進んでいると受け止められる場面では、上手な聞き手が評価的コメントなども入れながら話を引き出す役割を果たして、情報提供者自らが話の中心となって積極的に話を構築しているとは言えないケースが多く観察された。

以上の観察・分析に基づいて、話の先を続けやすくするストラテジーとして、相手からの評価的コメントが得られるような情報提供の仕方を考える練習を作成した。また、母語話者による雑談ビデオクリップも教材に載せ、学習者に雑談の展開が観察できるようにした。

<引用文献>

- ウォーカー 泉(2011)『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育 スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に』スリーエーネットワーク。
岡 まゆみ・筒井 通雄・近藤 純子・江森 祥子・花井 善朗・石井 智(2009)『上級へのとびら』くろしお出版。
国際交流基金(2012)『2012年度 日本語教育機関調査 結果概要 抜粋』(<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey12.html#report02>)
筒井 佐代(2012)『雑談の構造分析』くろしお出版。
増田 真理子・本郷 智子(2006)「ミニマル会話から拡げる会話教育 会話の「観点」を意識的に学ばせる試みとして」日本語教育方法研究会誌 Vol.13 No.2, 28-29.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

才田 いずみ(2015)「会話力強化のための雑談教材:中間報告」*Proceedings CASTEL-J 2015*, 査読有, pp.169-170.

才田 いずみ(2014)「話しことばをめぐる教材開発への一提案」『日本語教育方法研究会誌』査読無, 21 巻 1 号, pp.70-71.

[学会発表](計 2 件)

才田 いずみ(2015)「会話力強化のための

雑談教材:中間報告」CASTEL-J 2015: The 6th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese. 2015.8.7. University of Hawai'i, Kapi'olani Community College (ホノルル市, アメリカ合衆国).

才田 いずみ (2014)「話しことばをめぐる教材開発への一提案」第42回日本語教育方法研究会, 2014年3月15日, 横浜国立大学(神奈川県横浜市).

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ccis.tohoku.org/page/416>

NPO 法人科学協力学際センターのトップページから日本語 e-Learning をクリックして日本語学習 Menu ページに移動。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

才田 いずみ (SAITA, Izumi)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 20186919

(3) 連携研究者

高橋 亜紀子 (TAKAHASHI, Akiko)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10333767

井口 寧 (INOUCHI, Yasushi)
北陸先端科学技術大学院大学・情報社会基盤研究センター・教授
研究者番号: 90293406

小河原 義朗 (OGAWARA, Yoshiro)
北海道大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 70302065